

●博物館新収蔵史料（高岡町附足軽・金子家文書）に高岡城跡（古御城）内の塩硝蔵などについての記述を発見

・高岡城跡（古御城）内の「塩硝蔵」について

城内「明丸」東隅（現動物園内のシカ舎・ヒツジ舎辺）にあった塩硝土蔵。塩硝は硝石（硝酸カリウム）で黒色火薬の原料の一つ（他は硫黄と木炭）、または火薬のこと。通常、煙硝・焰硝と記すが、加賀藩では「塩硝」と記された。五箇山が良質な産地として著名。

塩硝蔵の建設・解体時期は不明。寛保3年(1743)頃の成立と推定される『不歩記』上巻に「一、外東方式間（約 3.6m）四方御蔵、鉄炮之薬入」とある。また、『射水郡分記録等抜書』（江戸後期頃成立。射水郡十村南家手代・塚本家文書）に、「長三間半（約 6.37m）、幅二間半（約 4.55m）、但シ壱口塩硝蔵」とある。さらに「高岡古城図」（高岡市立中央図書館蔵。江戸後期）には「二間半に三間半、柿葺、御土蔵／御鉄炮薬有」などの類似の記述が数点の城絵図や記録類にみられるが、塩硝の供給元や搬入・搬出の時期など具体的な管理や運用方法については不明である。

○金子家文書のうち、2冊の留帳（藩などからの回覧文書の写しや業務上の覚書などを記す）にあった記述。以下、新発見となるポイントを列記する。

●留帳1【金子家文書2『御用方伝承間見記』（江戸末期）】

①別表No.1「文政5年(1822)10月に古御城内の「塩硝蔵」が完成した。これは金沢の御作事奉行所から命令による新改築で、高岡町奉行所の担当者が引き請けた。費用は銀1貫550目4分(約450万円)」。※『高岡市史』等に記載は無いが、前年の文政4年(1821)6月24日の大火により古城内の米・塩、御門等と共に塩硝蔵も焼失していたと思われる。この記述により大火翌年に再建されたことが判明する。

②別表No.2「嘉永3年(1850)、古御城「御囲」(本丸か?)内に長5間(約9.1m)、幅8間(約14.5m)の新蔵1棟を金沢の改作奉行所の担当で完成した」。同No.3「嘉永3年7、8月頃、古御城「御囲」(本丸?)内の新蔵建設については御用番へ通達があった」。

※嘉永3年(1850)、城内に5間×8間の新蔵が完成。諸資料に古城内の蔵として大きさが判明している内には5×8間の蔵はない。唯一大きさ等の記録のない本丸南隅の「御郡方作食米蔵」の可能性が高い(作食米は農民が収穫期まで食いつなぐための食料で、藩は村々の石高に応じて春に貸付けて秋に返納させ、年貢米とは区別して作食蔵に納めた)。

③別表No.5「嘉永5年(1852)3月、高岡古御城番人、及び高岡町附足軽へ支給する鉄砲等の道具類書上げ」。

※加賀藩は幕末の動乱に対応し、各地の足軽等へも従来の旧式銃、及び必要備品を配布した。高岡の場合、古城番人へは火縄銃(異風筒)、町附足軽へはそれより長い「修羅筒」を配布したことが判明。

●留帳2【金子家文書3『都而心覚記』（江戸末期～明治初期）】

④別表No.6「元治元年(1864)6月、鉄砲調練用の火薬(計約96.5kg)2箱を古御城御土蔵へ入れた」。

⑤別表No.7「慶応元年(1865)配布文書。61.56kgの(中略)火薬と約85kgの鉛(鉄砲玉用)は古御城御土蔵を借りて入れた。／(中略)古御城御土蔵入」。

⑥別表No.8「銃卒(1863年、藩内22ヶ所に農兵と足軽等で組織された防衛部隊)調練用の残った火薬は古御城御土蔵に入れた。また雷管(雷管式の西洋式銃の弾丸発火具)(合計9,126粒)は私達高岡町附足軽と古御城御門番等の調練用に壮猶館(藩の軍事研究所兼学校)から配布された」。

※塩硝蔵と思われる土蔵に鉄砲調練用の火薬と鉛(鉄砲玉用)を搬入している(おそらく雷管も)。塩硝蔵の具体的な運用の一端がうかがえる貴重な記述。しかし、「借りて入れた」ともあり、これは動乱の幕末の臨時的な使用と思われる、塩硝蔵が建造されて以来の通常の運用は未だ不明。

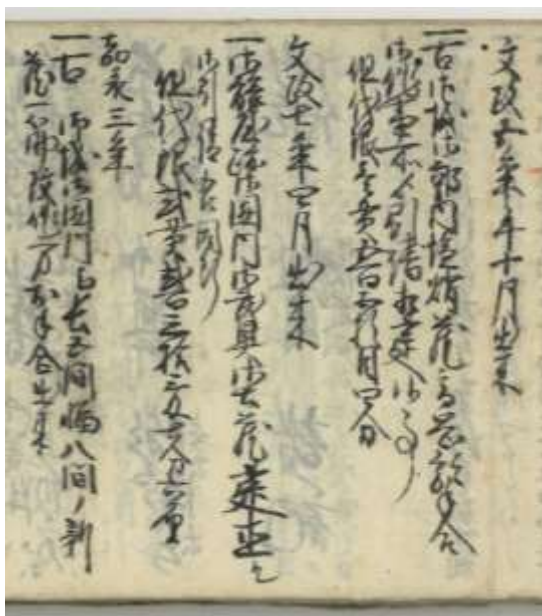
・高岡町附足軽について

高岡町附足軽とは、江戸時代、高岡町奉行に附属した足軽。承応元年(1652)に創設された。定員は20人。延宝5年(1677)に小頭が置かれ、21人となった。給与は小頭は切米30俵、平足軽は切米18俵で、ほか役料として各銀120目が町役人より支給。小頭は組下の足軽のほか、各番人(古御城御蔵・同門番、御旅屋御門、瑞龍寺方丈・同御門等)も指導監督した。平足軽の内5人は町会所の書記。残り15人は町内の警らに従事し、また綿場詰役・書問役等の行政・司法関係の事務も務めた。現高岡市白銀町(古くは足軽町や鉄砲町という)に屋敷が与えられ、小頭が70坪、平足軽が50坪であった。

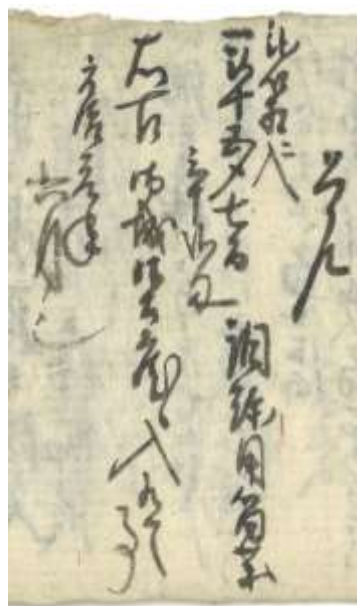
文久3年(1863)2月から翌年3月まで、加賀藩は民間から「銃卒」を取り立て新流砲術の調練を始めた。加賀3ヶ所、能登8ヶ所、越中では11ヶ所(高岡と伏木含む)の計22ヶ所。各50~60人が選ばれ、高岡など各地の足軽も銃卒に組み込まれ、毎日調練を課せられた。

・高岡町附足軽・金子家

当館は昨年、高岡町附足軽・金子家文書(107件158点)を新たに収蔵した。その内の由緒帳によると、金子家初代九兵衛は、前田利常小松在城の際、慶安元年(1648)高岡居住の古江次左衛門預りの「御鉄砲之者」として士官した。のち高岡に移住し、高岡町附足軽となった。のち6代団右衛門(1831年没)は賊を度々逮捕した功績で1828年11月、足軽小頭に任命された。**7代貫右衛門**(1813年生/留帳の筆者)は金山方御用他国入込鉛調理役、他国入込銅白味調理方主附を経て、砲術方御指南衆より砲術に熱心なので、上記稽古方棟取に任命。1859年4月、足軽小頭に任命。砲術稽古方指引、慶応3年(1867)、長年の砲術方や足軽組指導が評価され5俵加増。1869年3月、町附足軽が差止めとなり、割場附足軽に任命。同年10月、足軽も廃止となり、卒族となる。同12月、小頭も廃止。しかし年功等は有るので格別の配慮で宛行はこれ迄の通りとされた。同3年6月、第2大隊留書並支配方兼務に任命。同年11月、大隊御指兼につき上記の御用が無くなったと通達があった。明治5年(1872)11月、士族が免ぜられた。



右から4行分が上記①(別表No.1)、
左から3行分が同②(別表No.2)



上記④(別表No.6)